

デイビッド・ロックフェラー氏と「日米欧三極委員会」の矜持

本誌主幹 大中吉一

米国の友から日本の友へ

いよいよ米国大統領選挙戦が本格的にスタートいたしました。

いささか腑に落ちない共和党の候補者選びを経てドナルド・J・トランプ氏が共和党の候補者となり、いよいよ民主党候補のジョー・バイデン氏との喧々諤々の大統領選がスタートしました。そうした中、日本

が取り残されないためには、対トランプ戦略も視野に入れながら、7月の共和党全国党大会、8月の民主党全国党大会をしつかり見据え、11月の本選に向けて対策を練っておかなければなりません。

そのためにも、国賓待遇で訪米する際に、きちんと日本の立ち位置を確認し訴え、そのあるべき姿と行く末を確認していただいたものと思えます。



デイビッド・ロックフェラー氏

訪米といえは1978年、デイビッド・ロックフェラー氏にインタビュを申し込んだことを思い出します。ダメで元々と開き直ってお願いしたのです

が、当初は多忙を理由に断られたのですが、後に「米国の友から日本の友へ」というタイトルで、数多くの名士をご紹介いただきました。

最初にご登場いただいたのはハーバード大学教授のジェローム・コーエン氏、さらに元国防相作戦部長のジェームス・ギャビン氏、ソニーアメリカ社長のレイモンド・スターナー氏、元国務次官のジョージ・ポール氏、米トーマン筆頭副社長のJ・ファレル氏、さらにエル大学極東経済担当教授のヒュー・T・パトリック氏、ザ・シンガー社長のジョセフ・B・フレイビン氏、ブルッキングス研究所の名座にエル・サミュエルズ氏、そしてオーチス・エレベーター会長のラルフ・A・ウエラー氏と続きました。

そうした対談を経て、再度、本丸

ともいえるデイビッド・ロックフェラー氏にインタビュを申し込んだところ、ついに1979年にインタビュの快諾をいただくことができました。

ロックフェラー氏との対談の日程は2月9日と決まりましたが、なんとその数日前に長兄に当たるネルソン・ロックフェラー氏が急逝され、中止も止むを得ないという心境で羽田空港を飛び立ちましたが、デイビッド氏はきちんと約束を違えず時間を取ってください、無事にインタビュが実現いたしました。聞けば兄上が亡くなったのを知ったのは自家用機で中東を飛び回っていた最中とのことで、そのままその自家用機で急遽帰国したとのことでした。

そんな状況にもかかわらず、約束通りに1時間半にも及ぶインタビュに添えて下さったことは、誠に頭の下がる思いで、深く感銘したことを覚えております。

ご承知の通り、ロックフェラー家は米国の石油王であったジョン・ロックフェラーを祖とする富豪の家系で、ジョン・ロックフェラー2世は慈善家として知られています。私



田中角栄氏と毛沢東主席

がお会いしたデイビッド・ロックフェラー氏はそのジョン・ロックフェラー2世の子息であり、亡くなられた長兄のネルソン・ロックフェラーは第41代米国副大統領だった人物です。

米大統領選と 日本の立ち位置

周恩来首相らと会談し、日中友好条約を締結し国交正常化が実現いたしました。

こうした背景の中、このデイビッド・ロックフェラー氏やズビグネフ・ブレジンスキー氏によって立ち上げられたのが「日米欧三極委員会」であり、それが後に「日米欧三極委員会（トライラテラル・コミッション）」として知られるようになりました。

戦後高度成長に向かう途上だった日本が、デイビッド・ロックフェラー氏のおかげでこの「日米欧三極委員会」に名を連ねることができたことは、それ以降の日本の発展にとつととても重要なきっかけであり、そのことに尽力いただいたことのお礼も、その取材の際にさせていただきました。

おそらく、デイビッド・ロックフェラー氏は、その後のソニー、パナソニック、トヨタ、ホンダといったさまざまな日本企業の米国進出を予見されていたのだらうと思います。

「日米欧三極委員会」は年に1回会合を開き、初代の日本委員会委員長にはアジア開発銀行の渡辺武氏が就任されました。さらに外務大臣経



ヘンリー・キッシンジャー国務長官の「忍者外交」

験者の大来佐武郎氏、総理経験者の宮澤喜一氏、米国大使経験者の牛場信彦氏、新日本製鐵社長の永野重雄氏など、政財界の重鎮が続ぎ、毎回、侃々諤々の活発な議論がなされました。

私もオブザーバーとして何回か参加しましたが、「日米欧三極委員会」は、日本・北米・欧州の各界を代表する民間の指導者が集まり、非営利団体として、マクロ経済政策、国際通商、金融、政治・安全保障、エネルギー・科学技術などについて討議を行い、実に真剣で熱のこもった会議が行われ、まさに日米欧が力を合

わせて世界経済を牽引していこうという意気込みが感じられるものでありました。

あくまでも民間であることが前提であるため、宮澤喜一氏などは大臣になられた期間は参加されず、辞められてから復帰されるほどで、その自覚と覚悟はまさに見事というべきものでした。

「日米欧三極委員会」は、先進国共通の国内・国際問題について共同研究と討議を行い、政府及び民間の指導者に政策提言を行うことを目的としておりました。

いま、世界にはこうした矜持を保持したリーダーが欠けており、建設的な提言が行われない状況があるのではないのでしょうか。

岸田首相もせっかく訪米するので、すから、意思をしっかりと持ち、目的を見据え、きちんと結果を出す外交をしていただけなものと思いません。世界が激動する状況下にあり、米大統領選の結果による影響も見据え、長引く戦乱への対応も考慮した上での日本のあるべき姿と未来を示す指針を提示していただきたいと思っています。